

わが肌をなめよ

辻 憲男 (文学部教授)

奈良時代の僧・行基(ぎょうき)は、民衆を率いて橋や池をつくり、教化と社会事業に力をつくした。労役の人々のために、畿内に布施屋とよばれる安息所を設けた。聖徳太子も光明皇后も偉かったが、行基は“生ける文殊菩薩”であった。

有馬温泉へ向かう途中、武庫郡内で一人の病者に行き逢った。聞けば湯治に行く道で歩けなくなり、食も尽きたと言う。食べ物を与えると、鮮魚しか食えないと言う。長洲浜(いま尼崎市)まで行って魚を得て戻ると、味見をしると言う。なまぐさいものは禁じた身であるが、食べてみると美味である。寝たままで食べさせた。今度は、全身にカサブタができていたので、まことに聖人ならば、わが肌をなめよと言う。見ると焼けただれたような皮膚と臭気。行基は慈悲の心を奮ってなめた。するとその時、病者は紫金色の光を放ち薬師如来となってあらわれた…(「温泉山住僧薬能記」)。

学僧・智光は、行基をそしった罪でたちまち地獄におちた。灼熱の銅柱に抱きつき、骨も肉もとろけるという責め苦を何度もあじわった。今昔物語集によると、智光は幼いころ、主家の姫君から恩愛を受けた。姫は早世したが、その姫の生まれかわりがじつは行基なのだという。さて布施屋の旧跡・昆陽寺(こやでら)から大鐘が盗まれた。盗賊団の巧妙な手口である。物語作者は聖人を賛嘆する一方で、そういう悪業の話になると、意外や、俄然熱を帯びて語りだすように見える。筆者の思い過ごしだろうか。



伊丹市の“行基さん”昆陽寺。
古代の山陽道(西国街道)に面する。